

関東ふれあいの道 神奈川県③ 荒崎・潮騒の道（会山行）

◎期日：2025年3月1日

◎メンバー：FS（L）、KM（SL）、AI、OT、SS、SM



寒い日が続いた冬がようやく終わろうとしている。三寒四温の変わりやすい天候にハイキング決行日がどうなるのか気をもんだ。低気圧が西日本に進んで来ていたが、幸い3月1日は快晴との事。最高の日和のはずが思わぬ伏兵の春霞、上空は雲一つない晴天なのに地平線には霞が霽か、実に微妙なり。

午前9時京急三崎口に全員が集合し、3番乗り場の北行バス2つ目の停留所だから何処行きのバスでも良し、と乗り込む。今日は今までと違って暖かいとの予報に観光客が多く幾分混んでいる。下車停の矢作を通り越した。“しまった下車ボタンを押し忘れた”。バスはドンドン進む、「次は長井に泊まります」との車内報に慌てて運転席まで行き矢作で下車したいと伝えと「このバスは急行ですから止まりません」何を言っているのかこの客は！と、言うような調子で返答が返ってきた。自分一人ならまだしもメンバー5人も道ずれに、とんでもないことになった。仕方なく長井で下車する。この場所は帰りの到達点。「コースを逆回りで歩けば」とのメンバーの発案に助けられる。この片田舎のバスに急行があるとは……。明らかにリーダーのミスであった。しょっぱなから首の竦む思いだ。

小田和湾は静かであった。湾岸の富浦公園は人影もなく、海は青く岸壁付近浅瀬の水は透き通り光が水底の砂上に揺らめいている。「きれいね」と口々に聞こえてくる言葉にちょっと“ほっ”とした気がし、目頭が熱くなるのは歳のせいかな。青年が一人すぐ下でシーカヤックを操っている。富士山は頂きの雪だけが霞の中に浮かんでいる。風もなく穏やかな春日和。これで良かったのか、帰りの行程であれば立ち寄ることもなく疲れた足を引きずってバス停へ急いであらう。

少し進むとこの辺ではかなり有名な長井漁港。中にある魚市場が辛うじてそのプライドを保っているが昔ヨットで入港した頃とは違う雰囲気活気がない。道路沿いには古い漁具やロープが散乱、店もシャッターも上げず実にさみしい限りの道が荒崎公園まで続く。

荒々しい岩山を相模湾の波が削り雄々しく猛々しい景勝地荒崎は観光地であったが今は人影もまばら。三崎層という太古に深海で堆積、隆起した傾斜地層は三崎岩礁帯とも地中で繋がっている。公園の中に夕日の丘というチョットした高台がある。芝生の広場になっており真ん中にモチノキが1本、周囲は木藪に覆われ海は見えないが風よけにはなりそう。南端には小さな展望デッキ。流石にここは絶景だ。が、見えるはずの大島、伊豆天城、箱根、富士山は本日休業、西側の展望所にて海を見ながら昼食とする。



夥しい数のトンビが頭上を舞っている。観光客は我らの他にもう一組、いつも客が餌を与えるのか一向に離れず飛び回る。真上で上手にホバリングして、1~2mの微風の空中で停止できる能力と遠目が効くのは人知の及ばざるところ。下に餌が見つければ即座に羽を畳んで急降下してくる。皆が立ち上がると少しずつ数が減っていった。

“今日はシケタ客ばかりだ” と思ったことだろう。

夕日の丘を降りて東側に潮騒の丘という岩山有り。城山とも呼ばれ三浦義澄の居城跡との説明書きがある。相模湾が一望でき良い所ではあるが狭いし嵐が来たら吹き飛ばされそうだ。降りてさらに東に進むと岩稜帯の海岸線、ここから先、佃嵐碕までは三浦市も一度は整備を試みたが嵐による崩壊甚だしく、現在は通行禁止になっている。荒崎の名の由来というところか。荒波に吹き飛ばされた奇跡の橋はその場で通行可能になっている。

荒崎公園を後にバス通りを少し戻り、和田浜に向かうべく丘の上にある長井海の手公園（通称ソレイユの丘）へ入る。寒さから解放された公園は家族づれでこった返している。子供をのせるトロッコ、観覧車、展望台、売店、入浴施設、キャンプ場、農業施設、この創られた遊園地が現在の観光地なのか。朝、間違えて乗ったバスはここに来る直行便であったわけだ。

公園を突っ切り海側の階段を降りると佃嵐碕。和田浜海岸の北端である。後方を藪山、両脇を岩場で囲まれたこの海岸は和田一族のプライベートビーチであったことだろう。本日バスした和田城址はこの砂浜から距離 600 メートルの山の上。海、山の幸にも恵まれ住みやすそうな地だ。巴御前もここで泳いだのか？ そろそろ疲れが溜まってきた。海岸を抜けて矢作バス停から三崎口に。3 時前には副代表に無事完了の報告。さて、本番？の居酒屋へ・・・一軒目は何人もの行列、二軒目は・・・4 時から開店。「三浦海岸へいったら？道中花見ができるよ」店の大将のすすめに乗っかり線路沿いを一駅歩くことになった。今まで寒さで開き切らなかった蕾がこの暖かさで一気に関き河津桜満開の並木道。向こうからくる観光客をかき分けかき分け、計画にはなかったお花見をたっぴりと堪能することになった。

帰りの電車でぐっすり寝込み、家に帰りつく頃にはとっぴりと日が暮れ、地平線には2 日目の糸のように細い朧の月が、上空にはわが船名に戴いた宵の明星がいつものように出迎えてくれていた。